



第一章 獲物にされる美少女

一 大嫌いな幼馴染

昔から相性の悪い人間だった。所謂、腐れ縁というもので、関係だけは続いていた。稲場真凜は居心地の悪さを覚えながらも、じっと座っていた。

「本当に、お前があの真凜か？」

十畳の和室で、助六はジロジロと訝し気な顔で眺めてくる。

（やっぱり、相談するんじゃないかった……）

助六が自分を虐める理由は、明瞭簡潔であつた。

真凜という名前が女々しいということだ。小学生の頃から、男子に相応しくないと言つては、色々な人間と手を組んではやし立ててきた。

だが、今は状況が違う。

「そうよ、文句あるの？」

キラッと切れ長の瞳を光らせると、助六は押し黙った。

季節は春の桜が咲くころだった。

真凜の家は、助六の家と隣同士で、親の交流が盛んだった。助六は一人っ子で親は父親しかない。銭湯を経営しており、普段は番台に座っている。禿げ上がった頭を光らせて、女湯へ顔を向け、鼻を伸ばしている。

「いつから、女になったんだ！？」

無遠慮な問いに、真凜はムツとなった。

「デリカシーのない男ね。一週間前よ」

肩にかかる髪を掻き上げて、美女は眉を顰める。

（まあ、違和感を覚えない、という方がおかしいわね……）

性転したのは、一週間前の朝だった。両親を事故で亡くした真凜は、一人で眼を覚ました時、牀の異変に気付いた。不思議と不安も動揺もなかったのが、心に刻まれている。

（これじゃあ、大学にも行けないわ……）

強気な態度とは裏腹に、内心は弱りきっている。男子として入学試験を受けているのに、女子として門をくぐる訳にはいかない。

「残念だが、親父はしばらく帰ってこねえんだ。だから、相談と言われても、俺が困っちゃうよ……どうしたもんかな……」

嫌な性格の割には、心底困った時になると、非常に協力的な態度をとる。それが、助六の長所であり、腐れ縁を切り捨てられない理由でもあった。

「どこか旅行でも行かれたの？」

不思議そうに真凜は首を傾げた。

そうじゃねえ、と青年は舌打ちした。

「入院だよ。酒の飲み過ぎだろ。年も食っているからな。体にガタがきているのもある。半年から一年は、強制的に入院ってことになったんだ……」

美女はギョツと膝元で拳を握りしめた。

（なんて運がないのかしら……）

助六の家にまで上がり込んだのは、訳があった。

両親が交通事故で亡くなった時、葬儀から墓の面倒まで見てくれたのが、助六の父であった。昔、真凜の親に借りがあるという理由から、高校の費用まで面倒を見てもらった。

さすがに、大学までは甘えられない。真凜は、借財が終わった時点で家を売却した。そのお金を進学費用に充てた。住まいは、大学寮に引っ越すことになっていた。それなのに、プランは水泡に帰してしまったのだった。

「ずいぶん、慣れた格好をしているよな……」

助六の眼つきが幾分変わったような気がした。

（すんなり、順応できてしまったわ……）

自分でも不思議な気分だった。ベージュのニットに濃紺のプリーツスカート。即席で用意した服にも、すぐに馴染んでしまった。

青年は、ずいっと座布団を寄せてくる。

「お前、本当に真凛なのか？」

少しのけ反りながら、美女は陰の相を浮かべた。

「嘘言ってるの。何も得しないじゃない。困っているから相談に来たのよ。勘八さんにもお礼を言いたかったから……」

助六の父、勘八は面倒見のいい男だった。女癖と酒癖が悪く、お世辞にも外見はいいとは言えない。だからこそ、性格のよさが目立っていた。

どうするかな、と助六は腕を組んだ。

「助けてやってもいいんだけどな。あまりにも、お前が様変わりしすぎて、信用できないというか……何というか……」

どういう意味よ、と真凛は語気を強めた。

「こうやって話通じているじゃない。知らない人間と会話がすんなり弾むと思う？ 一番分かりやすい証拠じゃないの」

穏やかな陽光が、畳の部屋に差し込んでいた。助六は胡坐をかいたまま、チラチラと真凛の方を見る。その瞳が輝いた時、何か妖しく歪んだ欲望が伝わってきた。

「話なんて、調子を合わせれば誰でも出来る。そうだな。お前が女という証明を俺に見せてくれよ。真凛なら平気で俺に女を示すはずだ」

「え、ええ……」

想像だにしない幼馴染の提案に、真凛は胸へ手を当てた。

（もしかして……）

助六は真凛と同じ十九歳である。生年月日が四月一日と揃っているため、よくお誕生日の祝福も、一緒にすることがあった。

十九歳の男が、十九歳の女に抱くイメージは、痛いほど真凛にも理解できる。簡単には受け入れられない男の欲望だ。

「ちよつと……変なことを考えているんじゃないでしょうね」

釘をさすように真凛は言った。

助六の背後にある姿見に、真凛は視線を移した。

（確かに、どこから見ても女の子って印象よね……）

元々、中性タイプの真凛は、目鼻立ちがクッキリとしている上、バランスの取れた躰つきであった。肩口まで伸びた黒髪は艶々と輝いている。

ジリジリと助六は近づいてくる。

「変なことは、考えている。悪いけどな……」

ニヤリと嗤った顔は、緊張感に引き攣っていた。不自然な微笑みが、現実感を浮き彫りにし、恐怖となつて、美女の心へ迫ってくる。

「悪いけど、馬鹿な妄想に付き合っている暇はないのよ」

バツサリと切り捨てる。

（でも、助六以外に、こんなことを相談できる人間が……）

友達も親友もいる。いまの姿で、どうしたらよいか、身の上話をしたら、非常に困惑するだろう。もしかしたら、助六と同じように、邪な欲望に駆られるパターンもありえる。

「ちょっとだけ確かめさせてくれよ……」

更に、青年は近づいてきた。もう、お互いの顔が目と鼻の距離にある。

「無理。いやよ。ダメに決まってるでしょ……」

床柱に背中を預けて、真凛は横座りの姿勢をとった。

（でも、このままでは何も出来ないわ……）

身分証明書も無効になった今、当座をしのぐ方法が思い浮かばない。

「何をしたいのよ……」

弱気になった真凜は、つい、相手の要求へ受容の姿勢を示してしまふ。

「だからさ……」

少しずつ興奮気味になった助六は、舐めるような視線を向けてくる。

（この視線……）

困り果てて、助六の家に来るまでの一週間。

街を普通に歩いて、若い男たちの視線が気になっていた。男の頃には経験したことのない、粘り気のある視姦。見えない矢が、まろやかにふくらんだ胸や、色っぽく迫り出した尻にやってきた。

「お前が女である証拠を、一度、示してくれよ。頼みごとを叶えてやるんだから、誠意って奴を、俺に見せてくれ」

殺伐とした要求に、真凜は啞然とする。

「アナタが、そんなことをいうなんて……」

フルフルと全身が震えた。

真凜が視線を落とすと、青年のトレーナーズボンに行きついた。

（テントを……本気なの……）

柔らかい青い綿の布地が、無様なほどに、張りつめている。何を意味しているのかぐらい、すぐに分かった。

「アナタ、なんていう台詞も、昔から言っていたよな。不自然とは思っていないけど、いまのお前に言われると、普通過ぎる」

助六はそつと真凛のふくらはぎを触ってきた。

あまりのおぞましさに、美女は手を払う。

「やめて！ 気持ち悪いことしないで……」

強気で押しのけないと、助六のペースに飲まれてしまう。真凛は、相手を睨みつけながら、肩に力を入れた。

しばらく、助六は真凛の軀を眼で舐めまわしながら、何かへ考えを巡らせているようだった。美女は、この家から脱出して、頼りになりそうな親友がいないか、ヒントを捻りだそうとする。

（うーん、ダメだわ……）

艶やかな髪の毛から、丸い肩、大きなメロンバストと続き、麗美な双曲線をへて、S字状の括れた腰回り、丸々と迫り出した桃尻へ流れていく。

どこからどう見ても、正真正銘の美女であった。

「じゃあ、これならどうだ？」

助六は、何を考えたのか、自ら黒いアイマスクを着用した。

美女は困惑気味に尋ねる。

「それで、どうしようというのよ……」

いきなり自分から目隠しをする青年に、真凛はどう対応したらよいか分からない。辛抱強く、助六の返事をまった。

青年は息を乱し、唇を舐めてから言った。

「触るだけ。な。女と確かめる方法はいくらでもある。見られるのが嫌なら、さわるしかないだろ……」

真凛は相手の熱量に、眼を丸くした。

（ここまで欲しくなるものかしら……）

一週間とはいえ、性転してから、男欲は軀にない。華奢な肩をそつと掴まれる。武骨な指の蠢きに、美女は顔をそむけた。

「うう、本当にさわるだけにして。それから、本当に助けてよ」

ついに、真凛は助六の押しに、少しだけ折れた。

「じゃ、じゃあ……」

そつと肩から手が外された。

「二階の俺の部屋に行こう。ここじゃ、近所から丸見えだし……」

「ええっ、変な気を起こさないでよ……」

ぷっと、真凜は頬をふくらませた。

（助六の部屋に……）

嫌な予感が美女の胸に疼く。助六は大音量でロックやヘビメタを聞くため、窓も含めて、防音施工にしたと聞いたことがあった。

一方、ここで押し問答を繰り返しても、時間の浪費に終わることも分かっていた。ゆっくりと助六は黒いアイマスクを外した。

青年の瞳は、獣の欲で血走っている。立ち上がると、真凜を導くように歩いて行った。

「へえ、結構綺麗なのね……」

六畳間の部屋は、窓が閉まっていたものの、乱雑な印象とはかけ離れていた。ベッドが部屋の隅にあり、真っ白なシーツが輝いている。

本箱には、学習中の参考書がきちんと並べられており、音楽DVDはケースに収納されている。

「商売をやっている手前……」

父親に口うるさく言われているようで、助六は顔をしかめた。

外見とは違い、清潔感のある部屋に真凜は驚いた。

「じゃあ、ベッドに寝てくれ……」

助六に言われると、不思議にも抵抗感が湧いてくる。

「それから、どうするつもりなの……」

平然を装っていたが、自然と声は引き攣った。

澱みなく丁寧に助六は語りだした。

「服を脱いでくれ……俺の言う通りに」

平静な口調は、どす黒い欲望を隠すためのように、感じられた。

「続きは本文でお楽しみください」

法的拘束力を持つ重要事項および購入者同意契約

本文書は、成人向け官能小説作品（以下、「本作品」という）を公開・販売するにあたり、著者（以下、「当方」という）と購入者（以下、「貴殿」という）の間で締結される法的拘束力を持つ同意契約です。本作品の購入、ダウンロード、閲覧、またはその他の方法でのアクセス行為により、貴殿は本免責事項の全条項に完全かつ無条件に同意したものとみなされます。同意できない場合は、本作品の購入・閲覧を直ちに中止してください。

一年年齢制限および法的確認

本作品は日本国内法において成人と認められる18歳以上の者のみを対象としています。

本作品の閲覧・購入により、貴殿は自らが法的に成人年齢（18歳以上）に達していることを宣言・保証し、これに虚偽があつた場合のすべての法的責任を負うことに同意するものとします。

貴殿は、本作品を未成年者に提供・共有・販売・貸与しないことを誓約します。

貴殿は、本作品の閲覧にあたり、貴殿の居住地および閲覧地の法令で成人向けコンテンツの閲覧が許可されていることを確認し保証するものとします。

二 コンテンツの性質および免責

本作品には、明示的な性的描写、成人向けの要素、およびその他センシティブな表現が含まれています。

本作品に登場するすべての人物、場所、団体、事件、状況は完全なフィクションであり、実在の人物（生存者・故人を問わず）、団体、事件、場所とは一切関係ありません。いかなる類似性も偶然の一致であり、意図的なものではありません。

本作品で描写される行為、状況、関係性は、現実世界における法的・倫理的・道徳的価値観を反映するものではなく、また推奨・奨励・助長するものではありません。

本作品は芸術的・文学的表現の自由に基づく創作物であり、表現の自由を保障する憲法その他の法令により保護されています。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の想像力を刺激し感情を喚起する可能性があることを認識し、それらに対する対処は貴殿自身の責任であることに同意するものとします。

三 個人の感性と判断の完全責任

性的表現や官能的描写に対する感じ方は個人差があります。貴殿は完全に自己責任において本作品を閲覧するものとし、その判断と結果について当方は一

切の責任を負いません。

貴殿は、本作品の内容が貴殿の個人的価値観、信条、宗教的・道徳的・倫理的信念に合致しない、または挑戦的である可能性があることを明確に理解し、それにより生じる精神的・感情的反応について当方に責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、作品内容に不快感や心理的動揺を覚えた場合、直ちに閲覧を中止することが貴殿自身の責任であることを認め、これを怠ったことによる結果について当方に一切の責任を求めないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品を閲覧することによって引き起こされる可能性のある感情的、心理的、または精神的影響について当方が責任を負わないことを明示的に同意します。

四 販売プラットフォームの規約と購入形態

本作品は、各販売プラットフォーム（note、DLsite、FANZA、その他EPUB形式で配信するプラットフォーム）の規約に準拠して制作・販売されています。貴殿は、プラットフォーム固有の利用規約および制限事項をすでに確認し理解したことを確認するものとします。

貴殿は、本作品がもともnoteで公開された記事をEPUB形式に変換・編集して販売されている場合があることを理解し、それによる内容の差異や形式的

特性について異議を唱えないことに同意するものとします。

貴殿は、購入後の EPCB ファイルの管理は完全に貴殿の責任であり、ファイルの紛失、破損、または意図しない拡散について当方は一切責任を負わないことに同意するものとします。

五 著作権および厳格な利用制限

本作品のすべての内容、テキスト、キャラクター、設定、ストーリー、アートワーク、およびその他の創作的要素に関するすべての権利（著作権、商標権、その他の知的財産権を含む）は、完全かつ排他的に当方に帰属します。

貴殿は、以下の行為を明示的に禁止されることに同意するものとします…

本作品の全部または一部の複製、再配布、転売、貸与

本作品の全部または一部の公開朗読、朗読配信、公開上映

本作品の翻訳、翻案、改変、二次創作、派生作品の作成

本作品の内容に基づく商品化、グッズ制作

本作品を利用した AI 学習、データベース構築、テキストマイニング

本作品の全部または一部を SNS、ブログ、メッセージアプリ等で共有することその他、当方の権利を侵害する可能性のあるあらゆる利用

貴殿は、本作品を個人的に楽しむ目的でのみ使用できるものとし、それ以外のいかなる目的での使用も厳格に禁止されます。

上記の制限に違反した場合、当方は法的措置を含むあらゆる適切な手段を講じる権利を留保し、貴殿はそれによって生じた法的費用を含むすべての損害の賠償責任を負うことに同意するものとします。

六 完全な責任免除および法的保護

当方は、本作品の閲覧、使用、または本作品へのアクセスができないことに起因して生じたいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、懲罰的、または派生的損害（心理的・精神的被害、評判の損害、事業の中断、データの喪失、利益の損失を含むがこれらに限定されない）についても、たとえそのような損害の可能性について当方が知らされていた場合であっても、一切の責任を負わないものとします。

本作品の解釈、内容理解、および閲覧後に貴殿が取る行動や受ける影響については、完全かつ排他的に貴殿自身の責任であり、これに関連するいかなる請求からも当方を免責・防御・保護することに貴殿は同意するものとします。

貴殿は、本作品に関連して第三者から当方に対して提起されるいかなる請求、訴訟、要求、費用、責任、および支出（合理的な弁護士費用を含む）についても、貴殿の本免責事項違反から生じた場合、当方を防御、免責、および損害を与えないことに同意するものとします。

適用法で許可される最大限の範囲において、当方の総責任額は、貴殿が本作

品に対して支払った金額を超えないものとします。

一部の法域では特定の保証の除外または責任の制限を認めていないため、上記の制限の一部は貴殿に適用されない場合があります。しかし、法律で許可される最大の範囲で制限が適用されるものとします。

七 プライバシー、セキュリティおよびリスク認識

貴殿は、本作品の購入・ダウンロード・閲覧履歴が個人のプライバシーにかかわる機密情報であることを認識し、これらの情報および本作品のファイル自体の管理は完全に貴殿の責任であることに同意するものとします。

貴殿は、共有デバイス、公共の場所、職場環境、または第三者がアクセス可能な環境での本作品の閲覧・保存に伴うすべてのリスク（社会的評判、雇用関係、人間関係への潜在的影響を含む）を完全に理解し、そのようなリスクから生じるいかなる結果についても当方が一切責任を負わないことに同意するものとします。

貴殿は、インターネット通信、クラウドストレージ、デジタルデバイスに固有のセキュリティリスク（ハッキング、不正アクセス、マルウェア感染、データ漏洩など）を理解し、本作品の購入・保存・閲覧に関連するそのようなリスクについて当方が一切責任を負わないことに同意するものとします。

貴殿は、本作品の EPUB ファイルまたはその他のデジタル形式が、技術的な

問題、互換性の問題、またはデバイスの制限により正しく表示または機能しない可能性があることを認識し、そのような技術的問題について当方が責任を負わないことに同意するものとしします。

八 問い合わせと紛争解決

本作品に関するご質問、ご意見は連絡先までお寄せください..
当方は問い合わせに対する回答義務を負わず、回答の有無、内容、タイミングはすべて当方の裁量によるものとしします。

本免責事項または本作品に関連して生じるいかなる紛争も、日本国の法律に準拠するものとし、地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とします。

九 可分性と完全合意

本免責事項のいずれかの条項が無効または法的強制力がないと判断された場合でも、残りの条項は完全に効力を維持するものとしします。

本免責事項は、本作品に関する貴殿と当方の間の完全な合意を構成し、書面または口頭を問わず、本件に関する以前のすべての理解、合意、表明に優先します。

本免責事項は、当方の書面による明示的な同意なしに変更または修正することはできません。

十 承諾と効力発生

貴殿は、本作品を購入、ダウンロード、閲覧、または他の方法でアクセスすることにより、本免責事項をすべて読み、完全に理解し、法的拘束力のある合意として無条件に同意したことを認めるものとします。

本免責事項への同意は、貴殿による本作品へのアクセス時点で効力を生じ、永続的に有効であり続けるものとします。

法的通知… 本免責事項に同意せずに本作品にアクセスした場合、著作権法違反および契約違反となり、法的措置の対象となる場合があります。同意できない場合は、直ちに本作品の閲覧を中止し、すべてのコピーを削除してください。

本免責事項に同意された上で、作品をお楽しみいただければ幸いです。

最終更新日：二〇二五年三月二十九日

著者名… 宇佐見翔